

7. Oral Allergy Syndromeと各種アレルゲンの交差反応性について

(内科学第三)桜井かほり、馬島 英輔、小口 安美、丸岡 教隆、森田 園子、玉木 利和、小林 真人、露口 都子、松村 康広、新妻 知行、林 徹

食物アレルギーの中で口唇の腫脹、咽喉頭の掻痒感などの口腔内症状を伴うものはOral Allergy Syndromeとよばれる。当科アレルギー外来を受診した食物アレルギー患者のうち、Oral Allergy Syndrome様の症状を呈した4例について検討した。4例中3例が、小児喘息などのアレルギー疾患の既往が認められた。口腔内症状の原因食物として果実、大豆、小麦などがみられた。バラ科の果実が原因となった2例は、CAP RASTで同果実に陽性であり、同時にシラカンバ、ハシバミ属、ハンノキ属にも陽性であった。これらの間には、交差反応性が考えられている。シラカンバRAST陽性者では、高率にOral Allergy Syndromeが出現するといわれており、花粉症患者において、果物アレルギー発症を念頭におく必要があると考えられた。

8. リン酸ピリドキサルによる即時型過敏反応の1例

(皮膚科) 福士雅子、千葉友紀、楠原紀子、大井綱郎、古賀道之、

症例：45歳女性。既往歴：平成4年右卵巣嚢腫にて右卵巣摘出術。平成6年4月、腹膜炎にてブスコパン®、ビタミン5種を含む点滴静注を施行された直後、略全身に痒疹性皮疹出現。現病歴：平成9年11月12日腹膜炎にて同様の点滴静注施行中、全身潮紅と血圧の低下をみとめた。精査のため、当科受診。原因検索のため、使用薬剤の皮膚テストを行ったところ、ビオゼックス®(リン酸ピリドキサル製剤)のプリックテスト陽性。主成分であるリン酸ピリドキサールの希釈系列のプリックテスト陽性で、リン酸ピリドキサルによる蕁麻疹型薬疹と診断した。各種ビタミンB製剤、リン酸ピリドキサミン、塩酸ピリドキシニンにたいしてもプリックテスト施行。リン酸ピリドキサミンに対してプリックテスト陽性を示し、塩酸ピリドキシニンは陰性であった。リン酸ピリドキサミンとリン酸ピリドキシニン両者間に交差反応があると考えられた。リン酸ピリドキシニンによる、薬疹は非常に稀であり、自験例は第2例目であった。

9 アレルギー児および非アレルギー児のゼラチン特異IgE抗体と、ゼラチンアレルギーを起こした2症例
東京医科大学小児科学教室

伊能容子 中島周子 柏木保代 土田 尚
河島尚志 宮島 祐 武隈孝治 星加明徳

生ワクチン接種後のアレルギー反応がゼラチンに対するアレルギーであることがわかり、近年問題となっている。今回、我々はアレルギー患児のゼラチンに対する感作状況と全体としての健康人のゼラチンアレルギーの頻度を知るために、ゼラチン特異IgE抗体を測定した。

ゼラチンに対する特異的IgE抗体はアレルギー患児で219例中5例(2.3%)に陽性で、健常児(0~15歳代)では607例中で1例(0.16%)に陽性であり、アレルギー患児において有意に陽性率が高かった。陽性児の内訳は重症アトピー性皮膚炎3例、喘息患児2例であった。ゼラチンに対する特異的IgE抗体陽性児の5例はいずれもゼラチンを含んだワクチン接種後に副反応を認めた事はなく、ゼラチンを含む食物に対しても臨床的にアレルギー症状はなかった。また健常児296例で麻疹ワクチン接種前後にベア血清でゼラチン特異IgE抗体を検索したが、抗体が産生されたものはいなかった。